

(様式1)

令和7年度 自己評価及び学校関係者評価書

令和8年2月12日
江別市立上江別小学校

1 今年度の重点目標

「仲間と支えあい 主体的・協働的に学ぶ児童の育成」

○身につけさせたい3つの力を育む教育課程の編成・実施・評価・改善の推進

(学力定着と向上の実現)

○お互いを大切に し 支え合い高め合う子どもの育成 (思いやり・信頼関係の構築)

○規範意識のもと夢や目標の実現に向けて最後までやりぬく子どもの育成 (学年経営の充実)

育成すべき資質・能力

○自信 根気 ←学力・体力 (知識技能・思考判断表現力)

○おもいやり ←人との関わり・親切 (人間性)

○規範意識 ←挨拶・規律 (人間性)

2 自己評価結果に対する学校関係者評価

分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
経営方針の重点	身につけさせたい3つの力を育む教育課程の編成・実施・評価・改善の推進 (学力定着と向上の実現) を図ることができたか。	B	・1 単位時間ですべての要素を完結させようとせず、単元全体を見通した指導計画を作成し、単元を通してバランスよく3つの力を育成する。 ・当初の計画に固執せず、児童の実態や環境 (時間・人員) に応じて、目標の修正や指導計画の軌道修正を躊躇なく行う体制とする。 ・「対話」や「子ども主役」の授業を単なる活動で終わらせず、確実に学力定着 (知識の定着・思考力の向上) に結びついているかを検証し、授業の質を高める。	A	A
	お互いを大切に し 支え合い高め合う子どもの育成 (思いやり・信頼関係の構築) を図ることができたか。	B	・単に交流回数を増やすのではなく、教育課程全体 (時数) との兼ね合いを見据え、既存の児童会活動や総合的な学習の時間を意図的・計画的に位置づける。 ・異学年交流や情操教育について「実施して終わり」にせず、児童の変容 (自己有用感や思いやりの心の高まり) が見られたかを、アンケートや振り返りの記述等を用いて検証する。 ・道徳授業の振り返りにおいて、単なる感想で終わらせず、「自分は今後どうしたいか」「生活の中でどう生かすか」という自己の生き方や実践に結びつく視点を重視する。	A	A
	規範意識のもと夢や目標の実現に向けて最後までやりぬく子どもの育成 (学年経営の充実) を図ることができたか。	A	・今年度成果のあった「具体的な子どもの姿」による目標設定を継続する。スローガンにとどまらず、評価・検証が可能な行動レベルでの目標を各学年で設定し、学年経営の基盤とする。 ・「一つのことにと絞って粘り強く取り組ませる」という提案を受け、各学年で重点的に取り組む活動や生活規律を一つ具体的に定める。 ・児童に「最後までやり抜くこと」を求めるのと同様に、教職員自身も決定事項や職務に対して粘り強く取り組む姿勢 (範) を示し、学校全体で「最後までやり抜く風土」を醸成する。	A	A

教育課程・学習指導	地域や学校の実態を活かし、教育目標の具現化をめざした創意と調和のある教育課程の編成・整備と管理・実施・評価の充実に努めることができたか。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・既存の計画表をそのまま使うのではなく、今年度の反省（時数の過不足や行事との整合性）を全職員で洗い出し、上江別小の子どもたちの実態に即した、実効性のある教育課程につくり変える。 ・6年生で成果を上げている教科担任制（交換授業）のノウハウを全校に広げる。時間割の工夫や柔軟な人員配置により、教員が得意分野を生かして指導できる体制づくりを進め、働き方改革にもつなげる。 	A	A
特別支援教育	学校づくりの基盤として、全ての児童のニーズに応じた特別支援教育の推進に努める。（関係機関との連携、相談の充実や保護者への啓発、特別支援教育研修の推進）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・個別の指導計画作成やケース会議等について、手続きの簡素化や時間の短縮化など業務の効率化を図り、教職員の負担軽減に努める。 ・形式的な負担を減らしつつも、児童・保護者・担任の困り感に寄り添った実効性のある支援が継続できる体制を維持する。 ・担任が一人で問題を抱え込まないように、相談しやすい職場環境づくりを推進するとともに、連続欠席に至る前の段階（未然防止）から、不登校支援委員会や指導部と連携し、ケース会議等の必要性を検討・実施する。 	A	A
生徒指導	「生活のきまり」の定着を目指し、挨拶をはじめとした礼儀指導や規範意識を高める指導の徹底と自主的活動の推進に努める。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・来年度は「1期ごとの長期的な目標設定」に変更する。期間を長く確保することで、挨拶や廊下歩行などの課題に対し、定着するまで粘り強く指導・評価を行うPDCAサイクルを確立する。 ・目標設定にあたっては、「児童アンケート（客観的数値）」に基づき、児童の実態に即した重点項目を設定する。 ・学年集会や学級活動、委員会活動の場を活用し、児童自らがルールやマナーを考え、実行するプロセスを重視することで、真の規範意識の醸成に努める。 	A	A
	いじめや不登校・問題行動の早期発見、早期解決のための実態把握と指導に努める。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめ対策委員会や不登校支援委員会を定期的に行い、組織的に取り組むことで、校内の情報共有がなされ、いじめ見逃しゼロや不登校傾向の改善につなげることができた。今後いじめ案件に対して、双方への保護者連絡を確実にを行う。児童保護者から上がった訴えはすべて「いじめの疑い」として認知し、組織的な対応をすすめる。 	A	A
小中一貫教育	中学校区で実践する教科横断的な学習と地域と連携した行事の実践・評価の推進に努める。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的には、「中学校区のスタンダード」がどの教科・領域や行事に位置づけるかをカリキュラム上で明確にし、職員が意識的に指導できるよう周知・共有を図る。 ・総合的な学習の時間等で定着している地域人材の活用を、次年度以降も継続できるよう組織的な仕組みづくりに努める。また、既存のつながりを維持・深化させ、学校と地域双方が無理なく連携できる持続可能な教育活動を推進する。 	A	A

<p>学校関係者 評価委員に よる意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭学習が学校の課題として挙げられているが、何分間取り組むという目標で終始するのではなく、自主的に取り組めるような方策も必要だと思う。小学 6 年生のうちから、中学校での宿題のスタイルに慣れておくことも、中一ギャップを解消する方策となると思う。 ・教師は、働き方に関する様々な施策があり、時間のない中、熱心に児童の指導にあたってくれている。授業の準備や保護者との連絡など、業務が多岐にわたっているのが心配である。 ・今年度の学校の評価は、例年になく厳しめであると感じる。 ・学校の様々業務が属人的になっている状態であると、教員の異動によって業務が滞ることが懸念されるので、引き続き、学校業務の仕組化を推進させてほしい。 ・上江別小学校の顔づくり事業として、読書に取り組んでいることは承知しているが、我が子の実態として、読書にあまり積極的ではなく、算数の文章問題も苦手としている。次年度、読書に対する取組に何かしらの工夫をお願いしたい。 ・小中一貫の取組については、小学 6 年生や中学生の子どもがいると様子は伝わってくるが、学年が下がるにつれて実態が伝わりづらいと感じる。小中一貫の取組の周知のために、もうひと工夫、必要に感じる。 ・担任の先生も担任外の先生方も児童一人一人に対して、しっかりと指導をしていただけていると思います。朝、通勤時に車で止まると、子どもたちのほうから頭を下げて前を歩いていくのを見て、挨拶等の指導もできていると感じます。 ・小中一貫教育は、保護者にもう少しわかって（理解して）もらえる行事などがあればと思いました。 ・スマイルネクストの不正解だと、繰り返しになってしまうことやたまに習っていない問題があるところを直していただけると、子どもたちも安心するかと思います。 ・自己評価改善の方策の部分が、総括的・抽象的表現が多く、読者が理解しがたい。実務的に何をするか、何をしたかをもう少し具体的に記述したほうが良いと思います。 ・保護者アンケートを読ませていただき、予想以上に多くの保護者の方々が、学校運営全般に厳しい目で見ていることを感じました。保護者との面談・意見交換はアンケートのほか、どのような方法で、また年間どのくらいの頻度で行っているのか。 ・先生方の仕事の範囲が広範囲にわたり、いかに大変であるかを理解しました。国が進めている「働き方改革」に連動して先生方が過剰労働になっていることはないですか？ ・「計画に固執せず、柔軟に軌道修正を行う」「実施して終わり」にせず等、児童の現場を最優先にしている意識の高さを感じます。
---------------------------------	--

【評点】 A：よい B：おおむねよい C：ややよくない D：よくない